

『^{あいのもり}狼の森と^{ぞるもり}芥森、^{ぬすもり}盗森』というタイトルの、大好きな賢治の童話があります。

小岩井農場の北に 四つの森があります。
「狼森」「芥森」「黒坂森」「盗森」の四つです。
このお話は 森の名前の言われを黒坂森の丈岩が語ってくれたということです。(※このあらすじでは言われの話はカットしました)

四つの森に囲まれた野原に、山刀や鋏を持った四人の男が やってきました。

囲りの景色や土の加減を確かめ、「よし、ここに決めよう」ということになりました。

男たちは 来右方に向かって、「早くこお！」と呼びかけます。顔をま、かにした おかみさんたちや、五つ六つより下の子どもが 入走ってきました。

四人の男たちは あちこちの方に向けて叫びました。
「ここに畑起こしてもいいかあ」「いいぞお森が一せいにこたえました。

「ここに家建ててもいいかあ」「ようし」森が一べんにこたえました。

「ここで火たいでもいいかあ」「いいぞお」

みんなはまた叫びました「すこし木もらってもいいかあ」「ようし」

みんなは にわかにはしやぎ出し 大よろこびです。

つぎの日から、森はその人たちがむしゃらに働いているのを見るのでした。

寒い冬がやってくると、森は一生けんめいその人たちのために、北からの風を防いでやりました。

それから、子どもたちがいなくなったり、鋏が消えたり、いたずらがあったり...様々なことが起こりますが、それは人々とのやりとりのきっかけが欲しい森の仕業で、すっかり友だちになった四つの森に 栗もちをこしらえて お礼においてくる人たちでした。

その後 時節がら 栗もちも すいぶん小さくなったそうです。

自然と人間が すっかり友だちで、お互いの声をかけ合って

それぞれの自分を生か合っている いのちのやりとり。

そして 社会の在り方 --- 素敵です。

また、自分の必要としているものを「少し分けてもらう」、誰かの大切なことを感じ そのものを与える --- 経済の原点である気がします。

クリスマスの季節に、静かに「ほんとうのこと」を探し求める夜の時間をもちたいと思います。